✝

2025年

3月 第3･4･5週の主日礼拝説教要約

・3月16日　マタイ福音書　21：12－17．

『　祈りの家で　』

・3月23日　マタイ福音書　22：15－22．

『　神のものを神に』

・3月30日　ヨハネ福音書　15：1－10．

『　ぶどうの木　』

衣笠病院教会　牧師　宮原晃一郎

≪　祈りの家で　≫～≪　神のものを神に　≫

後の教会暦で名付けられた、所謂“棕櫚の主日”に、エルサレムに迎え入れられたイエスは、マタイ福音書によると、その直後に、神殿から商人を追い出します。２１世紀の今はなきこの神殿を“祈りの家”としたのは預言者イザヤが記した神の言葉でした。

私の家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。（イザヤ書５６：７ｃ）

この思いを受け継ぐイエスは、それに相応しい神殿となるべく、行動を起こします。

嘗て、幼子イエスが両親に抱かれて参詣に訪れた時、さらには１２歳のイエスが両親から逸れて残留したときは、それぞれそこは平日だったり、祭りの後だったりで、境内は静まりかえっていたようです。一方、今回のように過越祭の盛期となるとそうはいきません。エルサレム神殿は熱気と喧騒に包まれておりました。そんなさ中に、ここを訪れたイエスは、

…そこで売り買いしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを覆された。そして言われた…「私の家は、祈りの家と呼ばれる。」ところが、あなたがたは、それを強盗の巣にしている。
（２１：１２－１３）

イエスはこの時は、なぜか警備兵に捕らえられることもなく、人々に教えを説き、心身に重荷を負った人々を癒されたので、近くにいた祭司長たちや、律法学者たちの怒りを買いました。

その夜、神殿を出て、近隣のベタニアに宿泊したイエスは、翌朝、エルサレムに舞い戻ります。境内で再び、人々に教えを説いていると、そこに祭司長（や律法学者）、民の長老らが近寄ってきてイエスを試み、後からファリサイ人やヘロデ党の人々も、これに加わります。

…（ローマ）皇帝に税金を納めるのは許されているでしょうか、いないでしょうか。　（２２：１７ｂ）

彼らは、ユダヤ人のローマに対する納税義務について議論を吹きかけます。税金はローマの硬貨を用いて納付されるのですが、因みにこの硬貨は神殿に献納することはできません。理由はそこには律法では禁じられている偶像（＝皇帝の肖像）が彫られており、ユダヤ教の神殿からは拒絶される運命にあります。また、巷間、流通している通貨もだめです。どちらも神殿に納付する献納用の貨幣に交換しなければなりません。

ところが前日、イエスは貨幣を交換する神殿の両替人の台を覆しており、彼らの職務や、“存在”そのものを否定したともとれる行動をとっていたのです。この行動に対するイエスの自己責任も問われそうです。神殿に限らず、両替人の職務内容は、ユダヤ人の生活習慣と深く関わっていたからです。敵対者らの、二重三重に仕組まれる質問は、議論の応酬次第では、重大な局面に発展しかねません。イエスの言動（応答）そのものが“反社会的”であるとのレッテルを貼るのが彼らの目論見だからです。そんな彼らの悪知恵を、既に見抜いているイエスは、論点を一つに絞るべく…

「税金に納める硬貨を見せなさい…これは誰の肖像と銘か」、…「皇帝のものです」。…「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」。（２２：１９…２１）

彼らが目論む“想定問答”にはない、イエスの“当意即妙”が、彼らを圧倒しています。イエスの“一本勝ち”です。こうして瞬時に、敵対者らの巧妙な企ては一掃されてしまったのです。

さて、神に返すべき神のものとは？　その筆頭は言うまでもなく“信仰”です。

≪　ぶどうの木　≫

旧約聖書に出てくる“木”の譬えの中で、“ぶどうの木”は、エジプトを出て約束の地（カナンの地）に移り住んだイスラエルの“入植”の譬えとして、度々出てきます。神御自身がこの木の主人（＝植樹者）です。

ところが、意に反してイスラエルは御心に適うことなく主人を裏切り続け、この地で生き長らえることが困難になります。

流動的な時代を経て、一度は統一国家を築いたものの、長続きせず、南北に分裂し、やがて北（イスラエル王国）が、さらには南（ユダ王国）が滅亡します。その原因は全て、彼らの神（植樹者）に対する不信仰が、根底にありました。

時代は推移し彼らの生活空間は再び流動化します。しかし、その根本原因（不信仰）は揺るぎなく（！？）、神が重ねて民の植樹を試みるにも、もはや然るべき“土地”の確保も儘ならず、これを断念したのかどうかはいざ知らず、今度は民族ではない“独り子”を、ぶどうの木として、（不特定の）この世に対して“植樹”したのです。

私は（イエス）まことのぶどうの木。私の父は農夫（神・植樹者）である。私につながっている枝で実を結ばないものはみな、父（神・植樹者）が取り除き、実を結ぶものはみな、もっと豊かに実を結ぶように手入れをなさる。　（１５：１－２）

神は、これからは、ぶどうの木を天から見守るのではなく、「手入れをなさる」のだそうです。ここに、神の“方針転換”が明言されます。神と人とは以前よりも近い関係になりそうです。

私はぶどうの木…人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ…私につながっていない人がいれば、枝のように投げ捨てられて枯れる。　（１５：５…６）

イエスは、十字架の前夜に、これらの言葉を弟子たちに、さらには後のキリスト者に対しても語りかけているようです。このぶどうの木は、旧き約束の地にではなく、そこから解放された新しい民（キリスト者）のために植えられます。西暦７０年、ローマ軍に占領され、破壊され炎上したエルサレム（第二）神殿と、そこを中心とした民族としての信仰生活は頓挫してしまいます。むしろ、生まれ変わり、この“木”につながって生きる者こそが幸いを得て今日に至ります。